

## 今後の課題

出生前のカウンセリングには、4つの目的がある。①疾患の正確な診断を伝えること、②予後をわかりやすく誠実に描写すること、③可能な管理方法や治療方法を説明すること、そして④両親が最良の選択をできるように支援することである<sup>5)</sup>。出生前カウンセリングは、胎児診断に直面した際には不可欠であり、予後全般に影響する<sup>6)</sup>。そのため、熟練した技術を持ち合わせた専門家によるカウンセリングが必要であり、胎児診断された家族へのサポート体制が整備されていなければならない。そして、胎児診断に関する情報提供のあり方は、ガイドラインを念頭におきながら考えていかなければならないし、家族にとって‘Bad News’をどのようにどこまで伝えるべきかは、議論すべき点である。

胎児超音波で異常を発見される場合は、両親にとって「健康な子どもをイメージしているなかでの予期せぬ胎児診断である」ということであり、情報提供やサポートのあり方によって、子どもの予後が左右されることもあることを常に念頭におき、すべての家族が新しい命を喜び、お子様への愛を育むことができる支援体制づくりを、施設を問わず考えていくことができると考えている。

## 文献

- 1) 権守礼美：出生前診断を受けた母親への支援体制の現状と課題～看護の立場から～、第48回日本小児循環器学会学術集会総会抄録集
- 2) Brosig CL : Psychological distress in parents of children with severe congenital heart disease : the impact of prenatal versus postnatal diagnosis. *L Perinatal* 27 : 681-692, 2007.
- 3) Ellinger MK, Rempel GR : Parental decision making regarding treatment of hypoplastic left heart syndrome. *Adv Neonatal Care* 10:316-312, 2010.
- 4) ロバート・バックマン(著), 恒藤 暁(監訳) : 真実を伝える コミュニケーション技術と精神的援助の指針. 診断と治療社, 東京, 2011.
- 5) Allan LD, Huggon IC. Counselling following a diagnosis of congenital heart disease. *Prenat Diagn* 24 : 1136-1142, 2004.
- 6) Yeu BK, Chalmers R : Fetal cardiac diagnosis and its influence on the pregnancy and newborn : a tertiary centre experience. *Fetal Diagn Ther* 24 : 241-245, 2008.